

基研のATOM型研究員としての印象記

東大・理 松尾和洋

基研に一ヶ月、ATOM型研究員として滞在したのは、山々が新緑におおわれた気候の良い五月でした。残念ながら、物性関係のスタッフは、垣谷氏を除いて誰も居なく、その意味では最悪の時期でありましたが、それでも一ヶ月という期間は、意義深いものでした。意義とは、自分の日常生活の中で引きづっている諸々の雑事をしばらく忘れて、新鮮な気持で研究に専心できることでしょう。このような refreshment は、研究を行う上で思いのほか、重要な役割を演ずるのではないのでしょうか。そういった面で、基研が、のびやかで落ち落いた雰囲気の京都の北白川の一隅にあるという立地条件も大切な要素だと思われま

す。基研が設立されてから、二十年の年月が過ぎました。物性関係から云えば、第3期が終り、第4期がスタートする時です。この事実は重要です。私的なことですが、基研の創設の頃は、私の世代は、まだ小学校入学以前の年頃でしてもし、個人的な意識の上での自分の物理学に関する歴史と云ったものが存在するとすれば、その頃でさえ有史以前にあたるわけです。従って、かつての若手で、基研の創生期に活躍された方々が、今では学会の大御所となり、当時の話は、我々大学院生にとっては、もはや伝説として語り伝えられて来たものであり、心理的には、はるかに遠い昔の様に感じられるのは止むを得ないことの様です。

創設期には、夢と希望に満ちて、未来を志向する自由で広い精神を持ち得たのに、現在では、色々な制度や機構が整えられ、その結果、それらが変り得ないものとして感じられ、その心理的な背景が、何らかの枠組みとなり、研究する環境、あるいは、若い研究者の姿勢に、知らず知らずの内に悪影響を及ぼしているように思われてなりません。

しかし、本当は、そうであってはいけないのでして、制度は常に弾力的に運用する様努めなければならないはずで

松尾和洋

ともかくお偉方と混ってわいわい議論できる雰囲気こそ、常に新しい創造の可能性を秘めた場であるはずですし、新しい分野、新しい進歩の源泉ではないでしょうか。その様な雰囲気を持ち続けられない限り、ゆくゆくは、マンネリズムの淵に落ち込んでしまうでしょう。

基研の場合には、その様な危機を回避すべく、多くの人々が色々な努力を行って来た様に聞いて居ります。特に、創立十五周年記念のシンポジウムの記録を読みまして、基研を常に新しい創造の場として存続させて行こうとする意気込みと意欲が、多くの研究者の中に有ることを知り、心強く感じました。ただそれらの議論が、現在に至るまでの基研の活動にどれだけ結実しているのか、今の私の視点からは展望できません。

ビッグサイエンスまでも含む基礎物理学という漠然として、途方も無く大きな分野に対して、基研の固有の部門だけで、それらすべてをカバーできるものではないでしょう。そこでは、スタッフの方々の個性に委ねるのが最善だと思います。

他の研究所や大学が、確固とした制度のために、なかなか新しい意欲的な試みに対して柔軟に対応でき難しい現状において、基研の共同利用の部門こそ、その存在意義を大きく発揮するところです。その様な点から、アトム型、モレキュール型研究員の制度を拡充し、新しい試みに対して柔軟に対処でき、受け入れられる枠を大きくすべきです。また一方で、基研が今取り組んでいる情報センター構想の推進も画期的な意味を持っています。特に第三次情報（Review articleにあたる）を作成する部門を設立しようという案は、大変ユニークでこの計画が、是非とも実現することを望んでおります。